

龍

馬

慕

情

加  
野  
厚  
志

龍馬  
慕情

野

りようまほじょう  
龍馬慕情

一九九五年二月二八日 第一刷発行

著者 加野厚志かのあつし

発行者 若菜 正

発行所 株式会社 集英社

東京都千代田区一ツ橋二一五一一〇  
郵便番号 一〇一五〇

編集部 (〇三) 三三三〇一六一〇〇

電話 販売部 (〇三) 三三三〇一六三九三

制作部 (〇三) 三三三〇一六〇八〇

印刷所 廣済堂印刷株式会社

製本所 文勇堂製本工業株式会社

検印廃止

乱丁・落丁本が万一ございましたら、小社制作部宛にお送り下さい。送料は小社負担でお取り替え致します。本書の一部あるいは全部を無断で複写複製することは、法律で認められた場合を除き、著作権の侵害となります。

龍馬慕情＊目次

|    |        |   |
|----|--------|---|
| 一章 | 寺田屋襲撃  | 七 |
| 二章 | やすらい花  | 四 |
| 三章 | 遙かなる旅路 | 三 |
| 四章 | 二人の女   | 七 |
| 五章 | 洛中に死す  | 三 |
| 六章 | 雪割草    | 四 |
| 七章 | 土佐の潮風  | 六 |

八章 伏見哀歌

一八三

九章 新都

二〇七

十章 奈落の燈

二三六

十一章 月の桂

二四九

終章 決闘

二八三

あとがき

三〇六

装丁 坂川栄治事務所

龍馬慕情



## 一章 寺田屋襲撃

### 一

「おりようさん、しまい湯どっせ」

湯上がりのお登勢が、襖から左半身だけをのぞかせ、濡れた黒髪を大ぶりの櫛でとかしながら言った。  
船宿のしまい湯は、旅客たちの垢で汚れきっている。最後に入浴する者が湯槽を洗い清めるしきたりだった。

「はい、この綿入れを縫いおえたら……」

「いつまでも慣れへん針仕事をしてたら、水風呂になってしまうえ」

「そうどすな」

心の広いお登勢だが、龍馬が投宿している時にかぎって、どこかしら言葉の裏に棘がふくまれる。

帳場奥の小座敷で、お龍は背縫いの糸をとめた。寒さが指先にまで凍みている。小さな手火鉢の炭火は、とうに燃えつきていた。

雨戸が夜風に鳴っている。子ノ刻をすぎて、比叡山から吹き下ろす寒風も、いつそう勢いづいたようだ。  
霊山の夜気は、洛中から高瀬川ぞいに、一気に伏見の船宿まで流れ伝わってくる。

「それにしたかて大きな着物やこと」

お登勢は目をほそめ、笑声をもらした。

たしかに背縫いの丈が異様に長い。結び留めの糸も少しゆるんでいる。お龍は伏し目のまま生返事をした。

「うちの人はずれどつきかい。寺田屋のお仕着せの丹前では間に合いまへんし」

「どっちゃみち、今夜のうちに仕立てあがるもんでもないやろに」

「そやけど……」

「袖のそこ、糸がほつれてまっせ」

「元の生地が古すぎて」

お龍も、つい言い返してしまう。

義母のお登勢が、ふっきるように言った。

「さ、おりょうさん。お風呂をすませて二階の祝宴の座に」

「ええのやろか、男同士の席にまじって」

「にぎやかになって、よろしおすがな。坂本さまの大願成就の夜やもの」

慶応二年一月二十一日、薩長両藩は秘密裏に倒幕の同盟を結んだ。仲介者は土佐の坂本龍馬であった。

薩摩と長州は互いに相容れぬ仇敵だった。過年、元治元年七月に長州藩は京都へ出兵、日和見の朝廷に対し、倒幕の示威工作を図った。守護職松平容保ひきいる諸藩と闘い、緒戦に勝利をおさめた。が、同じ尊皇派の薩摩藩は長州の飛躍を恐れて幕府方に味方した。宮門付近で勇猛な薩摩軍が長州兵に襲いかかった。戦況は逆転した。大多数の兵は討死、将は自刃して果てた。長州軍は都から敗走し、賊徒の汚名をきせられた。世に言う、〈禁門の変〉である。

長州の怨念は深い。

惨敗を喫した桂小五郎は、三条橋下の乞食にまで身をやつして逃げのびた。薩軍の将は西郷吉之助であった。狷介な桂は、ことさら西郷を恨んでいた。

しかし、滅亡寸前の長州を救うには、薩摩の助力を得るほかはない。仲介人の龍馬の熱弁にうたれ、小五郎は悲壮な覚悟で入京した。二本松の薩摩藩邸で両藩の代表たちは顔を合わせたが、やはりうちとけず、気まぐれ酒を呑み交わすばかりだった。

交渉決裂のまぎわ、龍馬が薩摩屋敷へ乗りこんできた。たちまち重苦しい雰囲気が一変した。多弁な龍馬は、一人で両藩の立場を語った。涙をこぼして説諭した。

西郷は情に厚い。土佐っぱの心意気を感じ入り、

「桂さん、よろしく頼み申す」と、先に頭を下げた。その一言で薩長同盟は成ったという。

龍馬だけが持つ男の温もりが、凍えきった両藩の疑心を溶かしたのである。

そうした逸話は、お登勢を通じてお龍の耳に入ってくる。そこがもどかしい。龍馬は国事に奔走しており、たまに帰還すると、妻のお龍をさしおいて昔よしみのお登勢と語り合う。

「男の涙ひとつで、薩長同盟は成ったんえ」

「お義母はん、何でもよう知つといやすな」

「坂本さまとは、十年来のおつきあいどっさかいなア」

「ほんなら、おしえとくれやすな。うちの人の心の内を」

「おりょうさんのことだけ。これで氣ィがすみましたやろ」

「そないなこと……」

「おお寒。女の長話で湯冷めしてしもた」

お登勢は肩をすばめ、襖をびしゃりとしめた。どこかしら突き放すような所作だった。

廊下の足音が遠ざかっていく。お龍はとまどいぎみに閉じられた古襖を見つめていた。寺田屋の養女となつて、まだ日が浅い。養母お登勢の気持ちに計りきれなかった。船宿の女将として世なれているが、お登勢は、薄化粧の下にしっとりとした女心を秘めているようだ。

数日前から、寺田屋は臨時の休みとなっている。ほかの奉公人たちも実家に戻らせていた。それもこれも、一人の若者を幕府の捕吏たちから守るためだった。

若者の名は龍馬。奇しくもお龍と同じ神獣の名を有していた。

龍は古代より伝説の中で飛翔し、宙空に昇って雲を呼び雨をふらせ、大地の作物を繁茂させるといふ。

八年前。鴨川ぞいの桜が淡紅色の花弁を散らす頃、七条で町医をしていた父の居宅へ、土埃にまみれた長身の若者がふらりと訪れた。

応対にでたお龍を無遠慮に見つめ、ちぢれ鬚のむさい他国者は、切れ長の両瞼をしばたいた。しみとおるような笑顔だった。

「まっこと、きつい目をしとる」

あたりにサツと潮の匂いが漂った。

あの一瞬の清新な胸の高ぶりを、お龍は今でもはつきりと憶えている。

「万人に一つ、天駆ける尊い鳳眼じゃな」

と、龍馬は感嘆した。

高鳴る鼓動をおさえ、お龍はからくも声を発した。

「どなたはんどすか。あいにく父は不在ですけど」

「龍馬。土佐の坂本龍馬」

「うちはお龍と申します」

「知つちよる。七条小町と名高い美女じゃきに。やっと片割れの牝龍にめぐり逢うたぜよ」

「えっ？」

「お前とわしは、やがて一対になる」

「そんなこと……」

「たった今、決めた」

「父を訪ねて来はったのどちがいますのん？」

「なんの、父君の留守をねらってきた」

「若者は少しも悪びれず、ちぢれ鬚をぼりぼりかいて声高く笑った。

清明な笑顔につられ、お龍のきつい二重瞼もほころんだ。

「わるいお人やこと」

「しかたあるまい。一見撞情じゃきに」

「何どすか、それ」

「支那の言葉で、一目惚れちゆうことじゃ。お前を初見したとき、激しく情を撞かれた。もう、互いに後もどりはでけん」

その夜、お龍は父の目をぬすんで自宅を抜けだした。

しきりに身内がほてる。熱に浮かされ、春の夜道を「一見撞情、一見撞情」と異国の恋言葉を唱えながら走った。

若者と見交わした時、お龍は大らかな海を感じとった。京の盆地は寒暖がきびしい。人の心も細かく、

時には峻烈<sup>しゅんれつ</sup>すぎる。見知らぬ海に、お龍<sup>りゅう</sup>は夢想じみた憧れをもっていた。せまい盆地を鴨川のように流れ下り、広く温かい海に身をまかせてみたかった。一見<sup>いちげん</sup>の若者が、その流れにのせてくれると直感した。

鴨川の堤で龍馬は待っていた。

大きな枝垂<sup>しだ</sup>れ桜が、逢引き場所の目じるしだった。昂<sup>たか</sup>ぶった胸の奥に、鴨川のせせらぎが爽やかに染みていく。

夜目にもあざやかな落花の下で、お龍は初めて男の厚い胸に抱かれた。濃密な潮の匂いに全身が包まれた。たとえ、一夜かぎりの契りにおわっても悔いはなかった。男の素性について、お龍はまだ何も知らな

いまだだった。  
祖父が長州藩ゆかりの武士であったせい、父の檜崎<sup>ひらさき</sup>将作は勤王の志が深い。浪士たちとも親交を結んでいた。

へ安政の大獄<sup>やすしだいしやういん</sup>で、吉田松陰、橋本左内、梅田雲浜<sup>うめだうんぴん</sup>など多数の志士が投獄・斬首された折、父将作も素行を怪しまれて入牢した。獄のなかで肺を病み、赦免後まもなく衰弱死してしまった。

家長を亡くして、貧苦にあえぐお龍たちの前に、ふたたび潮の匂いのする若者が飄然<sup>ひょうぜん</sup>とあらわれた。

龍馬は俗事にも長<sup>た</sup>けている。檜崎家の苦境を三日でかたづけた。年若の妹と弟は、龍馬が私淑<sup>ししやく</sup>する勝海舟<sup>かつかい</sup>宅へ奉公に上がらせた。

当時、軍艦奉行だった勝は神戸にいて海軍操練所<sup>そうれんじょ</sup>をひらき、有志を募<sup>もつ</sup>っていた。お龍は親代わりとして、仮宿舎で面談をゆるされた。幕閣の身でありながら、洒脱<sup>しゃだつ</sup>な人柄だった。

「いいってことよ。龍の字が心底惚れた姐さんの弟妹なら」

勝は、龍馬が師匠と仰ぐだけに度量も広い。

小気味よいべらんめえ口調で、妹たちの身柄を引き受けてくれた。

翌日には二人で京都にもどり、お龍<sup>りゅう</sup>の叔父を仲人に立て、身内だけの仮祝言をすませてしまった。

さらに翌朝、高瀬舟で伏見へ下り、船宿を仕切る『寺田屋お登勢』の養女としてあずけ、折から発せられた幕府の征長令をくつがえすべく、龍馬は長州へ旅立っていった。

お龍は、町医の娘として京の古いならわしの中でひっそりと生きてきた。

けれども龍馬と出逢って、生来の自由奔放さをとりもどした気がする。一家は離散し、住みなれた町をすてたというのに、なぜか軽やかな浮遊感が心身を満たしていた。

そしてお龍は、薩摩藩御用宿『寺田屋』の養女として、どうにも得体のしれぬ夫の帰りを日ごと待つ身となった。

「あ、痛っ」

と、お龍は小声でうめく。

追想に酔って、仕付け針で指先を刺してしまった。氣をとりなおし、縫いかけの綿入れを手早く袖たたみにした。

龍馬は階上にいる。警護役として長州から同行してきた三吉慎蔵<sup>みよしんぞう</sup>と二人で、祝杯をかたむけていた。お登勢の許しもある。宴席に加わっても後ろ指はさされまい。

湯浴みをすませ、男同士の談論にまぎれこむのも一興かと思える。それに龍馬は、奇抜な女を好む風がある。

「男は愛嬌、女は度胸ぜよ」

それが龍馬の口ぐせであり、女の器量をはかる尺度になっていた。

京女は情が強い。お龍も、修羅場に至ると捨身になれる。父の死後、妹の光枝が花街の遣り手婆<sup>て</sup>の甘言

にのせられ、女郎屋へ売りとばされそうになったことがあった。

勝ち気なお龍は、単身で女郎屋へのりこんだ。廓くわくの無頼漢ごうたきたちにも人の情はある。心意氣にうたれたのか、「好きなようにせい」と笑い流し、無傷のまま妹を返してくれた。

筆まめな龍馬は、この武勇伝を光枝からきいて感じ入り、わざわざ土佐の実家へ書状で知らせたらしい。めとった嫁の紹介文としては、まったくふさわしくない。お龍は恥じ入るばかりだった。

小座敷を抜けてたお龍は、廊下のどんづまりにある湯殿へ入った。いったん逢いたいと思いはじめると、しきりに気がせく。紺かすみの着物と肌襦袢はだじゆばんをぬぎ、島田鬘はたけはとかずにおいて、熱い据風呂すゐ風呂に裸身をしずめた。

先に入浴したお登勢が、湯の冷めぬように追い焚きしてくれていたらしい。湯中の筒から、ぶくぶくと泡が浮かび上がってくる。鉄製のかまどを大桶に据えつけた船宿ならではの造りである。

「ふうーっ」と、吐息がもれる。針仕事の疲れが、肩からときほぐされていくようだ。

手ぬぐいで襟足をぬぐうと、柔肌にはじかれた湯が、胸の谷間からゆるやかに流れおちていく。小ぶりの乳房が互いにそっぽをむいて、ツンと隆起しているのが見える。知らぬ間に、肌の艶つやも張りも人妻の身体になっていた。

人は皆、とうに寝入っている時刻である。たっぷり熱めの湯につかって、しだいに憂いも晴れていく。幕吏が血まなこになって追尾するお尋ね者の素浪人が、自分には釣り合いのとれたお神酒徳利かみさけとくりなのだ。

どちらが一つ欠けても、神仏の実意に反することになる。お龍は龍馬によって守られ、龍馬もまたお龍が守りきる。

湯こぼれの音のほかは何も聞こえない。ひたすら待ちわびた日々の心労が、ゆるゆると洗い流されていった。

(それにしても)